

# 藝術研究所 研究調査報告書

9

2010

大阪芸術大学藝術研究所

# ご 挨拶

大阪芸術大学藝術研究所

所長 松井 桂三

『研究成果報告』第9号をお届けいたします。

この報告書は、平成21年度の公募の中より藝術研究所運営委員会  
が認めた補助費による研究調査の成果をまとめたものです。

本学に於ける研究調査活動が、より活性化することを願い、来年度  
以降も研究調査補助の活動を継続してまいります。特に総合芸術大学  
の特性を生かした、領域を超えた共同研究調査は、大いに歓迎いたし  
ます。

またこの報告書に対する批評・感想などお気づきになった点は当研  
究所宛にご連絡下さい。

## 藝術研究所研究調査完結研究課題一覧表

(平成21年)

研究ディレクター	研究課題	頁数
山 縣 熙 (文芸)	ライカと写真行為の革新 — 写真の可能性について	4
太 田 米 男 (映像)	映画復元学研究	9
原 一 男 (映像)	「映像記録・日本民衆史学」 大阪・泉南地区におけるアスベスト被害と石綿村百年史Ⅱ	28
籾 亨 (教養課程)	「文化の学としての出版・編集論構築のための基礎的研究(3)」	32

※各氏名の肩書きは、研究調査補助費申請書申請時の役職で掲載しています。

# ライカと写真行為の革新—写真の可能性について

研究年度・期間：平成 21 年度

研究ディレクター：山縣 熙  
(文芸学科 教授)

共同研究者：織作 峰子  
(写真学科 教授)

師岡 清高  
(写真学科 教授)

犬伏 雅一  
(芸術計画学科 教授)

森川 潔  
(写真学科 准教授)

奥田 基之  
(写真学科 講師)

学外共同研究者：平木 収  
(九州産業大学芸術学部  
写真学科 教授)

北尾 順三  
( 写 真 家 )

立花 常雄  
(芸術学部写真学科  
非常勤講師)

ライカに関わる研究テーマは、「ライカの登場が何を引き起こしたのか」をあらゆる角度から解明することである。この「あらゆる角度」のうち、今年度集中的に考察したのは、前年度に引き続きライカと撮影者の身体、ならびに、新しい角度から工業製品(apparatus)としてのライカの本質について考察することである。また前年度に引き続き、中川コレクションの文献について整理を継続して行った。

最終年度でもあり、これまでの総括を提示した後、今年度の研究報告を示したい。まず上記した問題設定のうち後者の二つに関わる部分をまとめておきたい。

中川コレクションについて初年度来整理を継続してきた。邦文については一応の完結をみたが、欧文部分についてはなお継続した作業が必要である。文献的部分について昨年度の報告を活用し、それに今年度の作業を加味して文献整理とそれに関連する研究の結果を簡潔にまとめておく。

中川コレクションの文献部分は、和書に関していうと、①カメラ雑誌、②写真集、③カメラの一般的な技術的な問題に関わる文献、④ライカに関わる文献からなる。カメラ雑誌は、アサヒカメラなどのバックナンバーであるが網羅的なものではない。写真集は、ライカを用いて撮影したアンリ・カルチュ＝ブレッソン、木村伊兵衛の写真集などが充実しているものの、これも徹底して収集されていない。③の技術文献は、カメラの使い方、カメラの機構解説書などであるが、戦前のライカ到来時におけるこの種の文献も含まれており、④のライカに関わる文献に分類することもできる。④は、中川氏自身がライツ社のさまざまなデータとライカ本体に関する造詣の深化を自ら活字にしたもの、また、書籍にしたものである。本格的な技術書については、カメラについての技術知識を本プロジェクトに関わりその方面に造詣の深いメンバーと協力して、なお継続的に整理作業を行う必要がある。

一方、洋書であるが、和書の①に相当するカメラ雑誌は皆無である。ライカについてライツ社自身が発刊している技術データをコアとする雑誌形式の定期発行文献が存在する。このコレクションは戦前については欠落が認められるもののほぼ完備した形のものである。戦後についてはほぼ完全にそろっている。言語は、英語、ドイツ語である。これらは、技術的な部分と写

真言説といえるものから成立している。和書の②に当たる写真集は、カルチュエ=プレッソンが中心で、ドイツ語では、名取洋之助の写真集以外は、ライカによる撮影指南書系統のものが何冊もあり、この系列の本命とも言うべきパウル・ヴォルフ博士の書籍がほぼ網羅されているし、英語の類書も確認される。和書の④に当たるものであるが、カメラの技術的問題、ライカに直接的に関わる文献は、すでに述べたライツ社の定期刊行物である技術情報誌に加えて、多数のライカカタログが存在する。これらの貴重なライツ社の定期刊行物については、目次の部分から全体像が見渡せるように、デジタル化を行った。文献全体についてはライカの技術資料が膨大であり、エクセルによって整理に取り組んでいるが、継続して作業をせざるをえない。

以上のように進めてきた文献整理から、中川コレクションについて、本研究の視座から取り組み得たテーマは、日本におけるライカ受容の解明である。中川コレクションの本質は、ライカ受容の一つの在り方についてのきわめて貴重な事例といえる。日本におけるライカ受容という問題を考える上で、(ライカメカニズムに対するフェティシズムのドキュメントという意味も含めて)特筆すべきドキュメントである。中川氏の受容の在りようは、中川氏を取り囲んでいたあるいは、中川氏以前のライカ受容者たちを取り囲んでいたカメラ受容の在り方、あるいはカメラを使う写真行為の在り方を視野に入れた写真に関わる言説空間全体を分析することによってはじめて解明できるものであり、ここで、研究上いわば非ライカ写真言説、さらにライカに先行する時代の写真言説への目配りが不可欠となってくる。この方面を掘削するための資料は中川コレクションには欠けているので、報告者が私的に収集してきたライカ以前の写真文献の言説と比較検討を行う形でライカ受容の実相の一端を解明しようとした。その線上に、中川氏を一典型とするライカ受容の意味を見極め、それを梃子に、欧米における同一の問題系へと考察を展開する。この際、機械ないし近代技術に対するフェティシズムというより包括的な問題圏を避けて通ることはできない。また、日本におけるライカ受容について写真映像をめぐる美学的・感性的問題を芸術写真から新興写真への展開軸にそって検討することが当然のごとく想定され必要であるわけだが、アマチュア的ライカ受容の位相が看過されてきているので、カルチュラル・スタディーズ的なアプローチでこの欠落を埋める必要が明白になった。

以上のような文献の言説分析の遂行を経年的に蓄積してきたが、最終年度においてライカ受容のあり方をグローバリゼーションの視点から考察する作業を開始した。ウォーラスティンの世界システム論の視座からすれば、18世紀末の産業革命と資本主義の拡大はヨーロッパを中心とする世界システムの急激な拡張であり、当然ながらこの拡張に国民国家形成前の「日本」、さらに国民国家形成後の日本も巻き込まれざるを得なかった。ヨーロッパ中心の世界システムへの「日本」・日本の統合は、その根底において、ブルデューのキー概念を援用するならば、統合進展時において「日本」のハビトゥス-プラチックの多元的連携構造への西欧のハビトゥス-プラチックの同じく多元的な連携構造が接合されるプロセスであった。ここに新たなハビトゥス-プラチックの連携構造の生成が生まれた。本源的なハイブリット性を持った明治のハビトゥス-プラチックの連携構造は、明治政府のガヴァナンスを担う集団において異種交配では

あるが、西欧的なプラチックの遂行による西欧的なハビトゥスの増殖浸透を実現していった。またガヴァナンスを直接的に遂行しないとしても、旧武士集団は、維新戦争における亀裂を抱えてはいるものの、ガヴァナンス担当と有機的な関係性を持ち続けていたわけであり、同じく西欧的なプラチックの遂行による西欧的なハビトゥスの身体化と無縁ではなかった。このような認識の下で写真術の受容の在り様を再考してみると、写真師として登場してくる写真受容の主体は、比喩的な言い方をすると写真行為における西洋的プラチックと江戸のハビトゥスが混合し流動化する場であった。そしてこの流動化した状態は、18世紀末から19世紀の初頭に起源をもつ西洋受容—たとえば蘭語文百科事典の幕府による組織的な翻訳活動—が、アイデンティティ・ポリティクスと関わって他者としての西洋を欲望の対象とすることで、常に象徴的価値を付与され、従って新たな文化資本としての意味を強力に帯び始めていた趨勢を取り込んで江戸のハビトゥスを毀損する形で再編成されていく。しかしなおハイブリッド性はいわばごちない形として保持されていた。このような状況を画期的に改変するのは、世界システムへの統合の加速的な進展である。ハビトゥスのハイブリット性は本質的に廃棄されえないものであるが、日清、日露戦争に象徴される近代産業化の進展は、プラチックの次元における西欧化を深部において遂行させ、とりわけ関東大震災を画期として、ハビトゥスにおける西欧的メカニズムの強度は著しく強化され、西欧的プラチックの産物はますます象徴的価値を高め、それと平行して西欧プラチックの身体化が文化資本の高度な蓄積として先行するプラチックを急激に駆逐していくことになる。ライカが具体的に受容される時期に先行する1920年代は、西洋的プラチックが、プラチックと連携する「物」、ウィットゲンシュタインの言い方を借りれば「内的関係」に置かれるプラチックと「物」が、特に「物」の側の画一性の実現度合いを高度化させて社会の各階層、活動領域へと浸透を実現させた。このようなコンテクストからライカの受容を考察すると、象徴的価値の付与から派生するライカ・フェティッシュの構造の一端が、先行的なグローバリゼーション—ウォーラスティンの世界システム論に強く依拠した見方であるが—の展開から透視できる。また、父権的構造を保持する西洋的ハビトゥスの受容がジェンダー化されていることでフェティッシュを担う主体の男性性も見えてくる。さらに、ライカのシステムティックな生産構造に支えられた商品的普遍性の実現から、その操作性が浸透させる画一的な身体技法の存在が把握できる。

工芸性を体した堆朱カメラに現出するものが、江戸的なハビトゥスとそのプラチックの成果であるとする、ライカは象徴的価値を獲得した西欧的ハビトゥスとそれと連携するプラチックの産物である。加えて、そうした産物が公的な空間、あるいは可視的な権力の空間に配されたものとしてまずは登場したが、カメラは、とりわけライカのようなカメラは、私的領域への西欧的ハビトゥスの侵入であり、象徴的価値への願望をかき立てる存在として受容を喚起するとともに、その使用において、軍事訓練などのいわばマクロな身体技法の内面化以上に、プラチックを媒介して西欧的ハビトゥスを身体技法として深く身体化し身体に登録すると考えられる。このように考えるとライカの受容におけるコロニアルな主体形成といった問題までもが浮

上してくることになり、いわば脱コンテクスト化された「物」としてカメラの機能に限定する受容論とは異なる地平が開けてくると思われるのである。

次に、ライカと撮影者の身体に関わる問題についての研究を概括しておく。考察の前提としては、当初より、心身二元論—たとえば自然な身体と文化を刻印された身体の二項対立—を堀崩すために、こうした図式におけるカメラの意義を考察することである。これはまず、被写体論としての身体論を撮影する身体とどのようにリンクさせるかという問題圏の中に、透明化されてきたカメラ（本研究ではとりわけライカ）をどのように組み込むかという問題である。カメラの透明化を前景化するためには、本年度研究の糸口として設定した問いは、①カメラそのものの歴史的展開を正確に辿りきり、ライカが工業製品として登場したことが、この歴史のなかでどのように意味付けしうるのかということ、また、②カメラの透明化を前景化するような先行的な研究・活動がないのかというものである。

問題の①について、カメラ・オブスクーラ以来、いわゆる写真カメラの登場までをまず二つ目の区切りとし、次に、写真カメラの登場からライカに到るまでを二つ目の区切りとして検討を加えた。前者についていえることは、日本における江戸末期のカメラ・オブスクーラ導入にも言えることであるが、規格に即した製造ということが一つのポイントなる。つまり、日本製のカメラ・オブスクーラが職人の手仕事として規格化されなかったように、報告者が科研調査と並行してドイツ、イギリス、フランス、イタリアで行った調査でもヨーロッパにおいても1500年代の終わりまでカメラ・オブスクーラの規格化は進んでいないと思われる。ところが、18世紀に入ると規格化が明確になってくる。その帰結点としてダゲールによるダグレオタイプ教本の出版が挙げられる。つまり、百科全書に認められる、普遍性をもった「写真機」の図面がそこには掲載されていた。光学機器のこのような普遍的図面化の先駆けを17世紀について見ると、キルヒヤーの『影と光の偉大なる技芸』の図版とロバート・フックの顕微鏡そのものの図版の間に決定的な断絶が存在していることに気づく。工業製品としての「写真機」の透明化の起点は、いわゆる科学革命に胚胎している。ただし、図面の普遍化、規格化が直ちに「写真機」の透明化に直結するわけではない。二つ目の区切り以降について「写真機」の展開を検討すると、確かに理念的には、規格化が確立されたものの、実際の「写真機」は19世紀全体を通じて、個々の製造会社によっていわば「工芸的」に生産され、その「工芸性」が次第に希釈されていく。今日トイ・カメラの流行について考える場合、いわばこの「工芸性」による物理的製品としてのある意味での非規格化に注目する必要があるのだが、19世紀の「写真機」はこうした工芸性を保持し続けたのである。これは単に「写真機」本体について言えるだけではなく、実は、「写真機」をそれとして機能させるシステム全体が工芸的性格を持っていた。これが意味するのは、「写真機」システムとでもいうものが、「写真機」をも含めて透明化されていないということである。このシステム全体の透明化は、19世紀末のコダックカメラの登場によって最後の段階に近づく。つまり、「写真機」についていえば、部品の完全な規格化によって具体物としての「写真機」は理念的な「写真機」のtokenとなることで、撮影者にとって完全に互換的な存在に



なったのである(もちろん、個々のコダックカメラの物理性が消滅してわけではないし、この点が実はまた考察すべき課題ではある)。ただ、コダックのカメラは身体の全面で構えることにより、なお身体との連携レベルで透明化していないが、抽象機械としての透明化は生産体制的に担保された。この路線の延長上におそらくライカは位置づけられるとみるべきであろう。

問題の②であるが、これについては写真研究ではなく、映画の分野にカメラの透明化を前景化する研究・活動があると考えられる。メタ・写真は写真制作のプロセスを前景化したが、カメラそのものについての前景化には辿りついていない。もちろん、そうした作業へと確実につながっていくはずだともいえるが、機械としてのカメラそのものの透明化は問題とされていない。映画研究の分野では、とりわけ前田英樹がベルクソン＝ドゥルーズの系を援用して、カメラの非中枢性を前景に押し出した。この非中枢性は、ベンヤミンの写真の無意識、いささか粗略な議論ではあるが、シュールレアリスムの写真などと直ちに連想の輪を生成するポテンシャルを持つ。しかし、実は、ベルクソンにおける「イメージ」の理解が正当に継承されつつも、「写真機」についてのあり得べき考察の可能性が放棄されたところから非中枢論は展開されていると思われる。したがって、この非中枢性について、その理論的な武器としてのポテンシャルを認めるにしても、物とそれと内的関係にある行為という視点から、徹底した再考が必要である。これは今後の課題とするほかない。

このような認識を念頭においてブラッケージの撮影行為に注目すると、機械としてのカメラそのものの前景化、透明化の転倒が実践されている。実験映画におけるカメラの前景化を一つの突破口としてカメラの身体を撮影する身体とともに取り戻すことが最終的な課題として浮上してきた。

最終年度において、文献担当の研究がたどり着いたところは、以上でその核心部分を提示できていると考える。所期の問題設定を解決する突破口をいくつか発見したものの、その先へと考察を展開する手前のところで、研究年度の終わりを迎えざるを得ないのは残念ではあるが、今後の研究を深化するための方向付けはほぼ出来上がったと思うので、この3年間の蓄積をより具体的な論文、著述等の成果に結実させたいと思う。



# 映画復元学研究

研究年度・期間：平成21年度

研究ディレクター：太田 米男  
(映像学科 教授)

共同研究者：豊原 正智  
(芸術計画学科 教授)

志村 哲  
(音楽学科 准教授)

学外共同研究者：松本 夏樹  
(芸術計画学科 非常勤講師)

森脇 清隆  
(京都府京都文化博物館学芸課 主任学芸員)

坂本 曠一  
(演奏学科 教授)

旭堂 南陵  
(芸術計画学科 客員教授)

中島 貞夫  
(NPO 法人京都映画倶楽部 理事長)

須佐見 成  
(株MAGICAウエストフィルム事業部 常務取締役・部長)

犬伏 雅一  
(芸術計画学科 教授)

宮島 正弘  
(映像学科 客員教授)

安井 喜雄  
(ブナネット映画資料図書館：神戸映画資料館代表)

寺井 隆敏  
(株：クリエステッチ 代表取締役)

吉川 幸夫  
(映像学科 教授)

上倉 庸敬  
(大阪大学文学部 教授)

ジョアン・R・バナディ  
(ロチェスター大学 (アメリカ) Japanese & Film Dept. 准教授)

遠藤 賢治  
(キャラクター造形学科 教授)

石原 香絵  
(NPO 法人映画保存協会 理事長)

芸術系大学としての本学の特性を生かした復元作業や技術研修を含む「映画復元学」の学術的な体系化をめざす目的でこの研究を始めた。本学で「映画復元学」を立ち上げることには幾つかの点で他大学より適した環境と意義を持つと考えている。まず、本学の映像教育が映画フィルムを用いた「創作」を主体としており、重複する技術の集積とノウハウを持っていること。また、創作面だけでなく、アーカイブまでも網羅することで、映像教育の一貫性が図れること。さらに映画復元によって映画の歴史的な認識と映像教材を充実させ、何よりも映画復元に関しては他大学にない実績を持っていること。これらの点を踏まえ、この研究を3年計画としてスタートさせた。

これまで進めてきた「映画復元プロジェクト」による映画フィルムの収集と復元、保存は、本学の映像教材コレクションの充実を図るだけでなく、700本近い玩具映画フィルムを復元することによって、あらゆる劣化症状に対応できるノウハウと知識を高める上で、わが国の映画修復技術向上に一役を担ってきたと言える。また短い映像の断片ではあるが、無声映画再発掘と歴史的映画の消滅を救い、少なからず初期日本映画史の再考に貢献できたと自負している。この間「玩具映画プロジェクト (TOY FILM PROJECT)」のホームページを立ち上げ、OUAテレビによる「おもちゃ映画」の動画配信の実現によって、収集映像の活用と広報の役割を果たしてきた。これは学内外の研究者への情報公開であり、また題名不詳作品に関する情報収集や指導も受け、特に映像配信は漸く本プロジェクトが広く認知される有力な機会となっている。

本年度は、まずフィルム復元と保存の歴史的アプローチ、内外のアーカイブや教育施設の調査、具体的な作業フローと学術的な視点や実務的な側面についての研究を第1のテーマとしていた。この情報集積は、「映画の復元と保存に関するワークショップ」を提案することで押し進めている。恒例となりつつある「映画の復元と保存に関するワークショップ」は、作業現場の専門技術者の人材育成を目的に始めたが、第4回目となり、映画会社や映画関連団体の関係者

や博物館学芸員、大学の先生方の参加を得て、情報交換の場になりつつある。その点では、今回のテーマである「映画復元学」への様々な専門家からのアプローチとして、多様な研究課題を提供されることになった。今年度のワークショップでは、映画撮影者からの提言として「日本の撮影現場ではデジタル化が進んでいるが、デジタル化の最前線に行くアメリカが最も映画フィルムでの保存に熱心であり、施策も充実させ、取り組みも最も進んでいる」との発表があり、博物館の学芸員からは、地域におけるアーカイブの現状や問題点が明確にされ、国立フィルムセンターの研究者からは、国の映画保存に関する取り組みの紹介とアメリカ映画アカデミー協会が発表した「デジタルでの保存は、フィルム保存より11倍の費用が係る」と試算されたことが紹介された。映画会社からの発表は、文化的な価値よりも営利的な価値が重視され、DVD化に向けて、採算を考えた原版保存と修復復元が欠かせないと発表は、民間や地域での映画復元の取り組みに現実の厳しさを教わることとなった。また、国際フィルム・アーカイブ連盟 (FIAF) のサマースクール (ワークショップ) に参加した映画保存協会員からは、欧米での映画復元の取り組みと具体的な人材教育の実例が紹介された。今回の目玉というべき発表は、文化庁の専門官によって、現在わが国が直面している映画保存の現実と、政権交代による施策の変更によって、復元の費用確保は厳しくなると予想されることが説明された。これらの発表自体が、われらの「映画復元学」構築のための諸課題を様々な観点から提示された形となり、大いに参考になった。

今年の特出すべき玩具映画の復元例としては、山中貞雄監督の「鼠小僧次郎吉・道中の巻」である。今年山中監督の生誕百年という記念すべき年であることで、新聞やテレビ取材を受けた。この映画に関しては、京都府京都文化博物館と国立フィルムセンターでの山中貞雄特集での上映に参加した。30秒ほどの短い映像でありながら新聞の1面に取り上げられたことは、20代で夭折し、残存する映画が3本しかない天才山中貞雄作品の発見が如何に要望されているかを反映している。この取材を機に、これまでの映画復元プロジェクトの紹介という形で、在阪の新聞各社の取材を受けることになったが、これも本「映画復元研究」の成果が漸く現れたと考えている。また、旭堂南陵氏の活弁と星空楽団の伴奏で、ワッハ上方での「玩具映画と無声映画の会」上映会は、3月末に玩具映画の紹介に続き、10月には2回目で、映画「荒木又右衛門 (荒木伊賀越・三十六番斬り)」(1930年、悪麗之助監督作品)の上映会として活動を続けている。

これらの研究成果を踏まえ、来年度は京都映画祭の年であり、活発にアピールし、またデジタル修復も含め本学らしい「映画復元学」をめざして、研究を進めてゆきたいと考えている。

## ちゃんばら（時代劇）

- 1  「中山安兵衛」2008年8月1日～2008年9月1日
- 2  「薩南総動員」2008年8月1日～2008年9月1日
- 3  「血染の十字架」2008年8月1日～2008年9月15日
- 4  「まぼろし峠・江戸の巻」2008年8月1日～2008年9月15日
- 5  「月形半平太」2008年9月1日～2008年10月1日
- 6  「花火」2008年9月1日～2008年10月1日
- 7  「清水次郎長・ドクロ篇」2008年9月15日～2008年10月15日



「御家人桜」2008年9月15日～2008年10月15日



「お好み安兵衛・花婿の巻」2008年10月1日～2008年11月1日



「奥方お藤の方」2008年10月1日～2008年11月1日



「忍術真田十勇士」2008年10月15日～2008年11月15日



題名不詳（渡し場の茶屋）2008年10月15日～2008年11月15日



「紋三郎の秀」2008年11月1日～2008年12月1日



「血煙高田の馬場」2008年11月1日～2008年12月1日



「雪の渡り鳥」2008年11月15日～2008年12月15日

- 16  「仇討選手」2008年11月15日～2008年12月15日
- 17  「元禄快拳・大忠臣蔵」2008年12月1日～2009年1月15日
- 18  題名不詳（芸者の座敷踊り）2008年12月1日～2009年1月15日
- 19  「実録忠臣蔵（帝キネ）」2008年12月15日～2009年2月1日
- 20  「京に上った退屈男」2008年12月15日～2009年2月1日
- 21  「国定忠治」2009年1月15日～2009年2月15日
- 22  「暗討ち」2009年1月15日～2009年2月15日
- 23  「神変麁香猫」2009年2月1日～2009年3月1日



「投げ節弥之」2009年2月1日～2009年3月1日



「大菩薩峠・甲源一刀流」2009年2月15日～2009年3月15日



「八百蔵吉」2009年2月15日～2009年3月15日



題名不詳（中山安兵衛？）2009年3月1日～2009年4月1日



「栗山大膳」2009年3月1日～2009年4月1日



「二宮金次郎」2009年3月15日～2009年4月15日



「荒木又右衛門 春季特作品」2009年3月15日～2009年4月15日



「家賃と娘と鬻浪人」2009年4月1日～2009年5月1日



32 「剣を越えて」 2009年4月1日～2009年5月1日



33 「平手造酒」 2009年4月15日～2009年5月15日



34 「狂へる名君」 2009年4月15日～2009年5月15日



35 「一心太助」 2009年5月1日～2009年6月1日



36 「鞍馬天狗 復讐篇」 2009年5月1日～2009年6月1日



37 「大検劇・髪」 2009年5月15日～2009年6月15日



38 「謎の人形師」 2009年5月15日～2009年6月15日



39 「江戸情炎史」 2009年6月1日～2009年7月1日





40

「三味線武士」2009年6月1日～2009年7月1日



41

「御用船」2009年6月15日～2009年7月15日



42

「エノケンの森の石松」2009年6月15日～2009年7月15日



43

「宮本武蔵」2009年7月1日～2009年8月1日



44

題名不詳（岡引の銀蔵）2009年7月1日～2009年8月1日



45

「夢現三百年往来」2009年7月15日～2009年9月1日



46

題名不詳（頭巾の立ち回り）2009年7月15日～2009年9月1日



47

「月形半平太」2009年8月1日～2009年9月15日

- 48  「大政小政」2009年8月1日～2009年9月15日
- 49  「加賀見山 + 槍持街道」2009年9月1日～2009年10月1日
- 50  「文武太平記」2009年9月1日～2009年10月1日
- 51  「源三郎異変」2009年9月15日～2009年10月15日
- 52  題名不詳（子供を連れてくる）2009年9月15日～2009年10月15日
- 53  題名不詳（松之助の侠客）2009年10月1日～2009年11月1日
- 54  「暎の母」2009年10月1日～2009年11月1日
- 55  「丹下左膳・日光の巻」2009年10月15日～2009年11月15日



56

題名不詳（橋の上で）2009年10月15日～2009年11月15日



57

「浪人の群」2009年11月1日～2009年12月1日



58

題名不詳（女に助けられ）2009年11月1日～2009年12月1日



59

「次郎長一番斬り 追分三五郎」2009年11月15日～2009年12月15日



60

「丹下左膳・第二篇」2009年11月15日～2009年12月15日



61

「赤穂浪士一番槍」2009年12月1日～2010年1月15日



62

題名不詳（宴会中に呼びに来る）2009年12月1日～2010年1月15日



63

「燃える渦巻」2009年12月15日～2010年2月1日

64



「続大岡政談・魔像解決篇」2009年12月15日～2010年2月1日

## 国産アニメーション

1



「お化寺（全一卷）」2008年8月1日～2008年9月1日

2



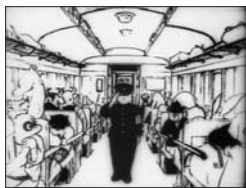
「豪快太郎世界漫遊記」2008年8月1日～2008年9月15日

3



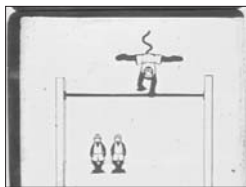
「空の桃太郎（全一卷）」2008年8月1日～2008年9月15日

4



「太郎さんの汽車」2008年9月1日～2008年10月1日

5

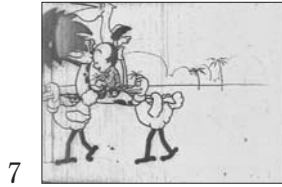


「動物器械体操」2008年8月1日～2008年9月15日

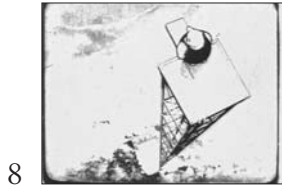
6



「冒険ダン吉・重砲連隊の巻」2008年9月1日～2008年10月1日



「猛獣天国」2008年9月15日～2008年10月15日



「動物運動会2水泳跳込・白熊/河馬」2008年10月1日～2008年11月1日



「のらくろ鬼中尉とミッキー・芝居騒動」2008年10月1日～2008年11月1日



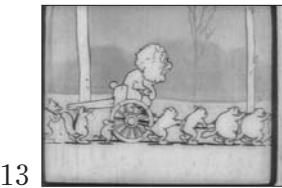
「金太郎〈第二巻〉」2008年10月15日～2008年11月15日



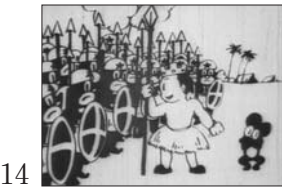
「火星飛行」2008年11月1日～2008年12月1日



「砂煙高田馬場」2008年11月15日～2008年12月15日

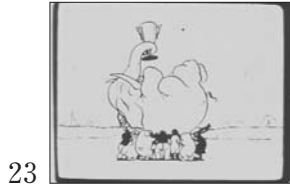


「豚平と猿吉」2008年12月1日～2009年1月15日



「冒険ダン吉・外人征伐」2008年12月1日～2009年1月15日

- 15  「日の丸旗之助・大捕物の巻」2008年12月15日～2009年2月1日
- 16  「漫画祭り」2009年1月15日～2009年2月15日
- 17  「天晴れガレ助」2009年1月15日～2009年2月15日
- 18  「忍術チビスケ」2009年2月1日～2009年3月1日
- 19  「唯野凡児・東京見物」2009年2月15日～2009年3月15日
- 20  「かちかち山」2009年3月1日～2009年4月1日
- 21  「近藤勇と凸ちゃん」2009年3月1日～2009年4月1日
- 22  「凸ちゃんの忍術くらべ」2009年3月15日～2009年4月15日



「動物オリンピック」2009年4月1日～2009年5月1日



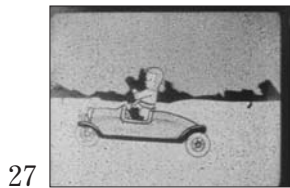
「桃太郎 / 鬼ヶ島鬼退治」2009年4月15日～2009年5月15日



「正ちゃんの動物地獄」2009年5月1日～2009年6月1日



「日の丸旗之助・化物屋敷」2009年5月15日～2009年6月15日



「底抜けドンチャン」2009年6月1日～2009年7月1日



「冒険ダン吉・歓迎野球大会」2009年6月15日～2009年7月15日




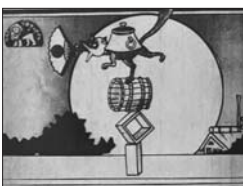






「満州事変漫画・馬賊大征伐」2009年7月1日～2009年8月1日



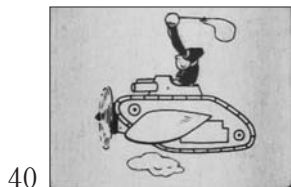
「桂小五郎と凸坊」2009年7月15日～2009年9月1日



- 31  「金太郎・足柄山」2009年7月15日～2009年9月1日
- 32  「一寸法師」2009年8月1日～2009年9月15日
- 33  「チビ助捕物帳」2009年9月1日～2009年10月1日
- 34  「文福茶釜」2009年10月1日～2009年11月1日
- 35  「底抜ドン助・仇討道中双六」2009年10月1日～2009年11月1日
- 36  「浦島太郎」2009年10月15日～2009年11月15日
- 37  「花咲爺」2009年10月15日～2009年11月15日
- 38  「大力太郎の武者無茶修行」2009年11月1日～2009年12月1日



「お伽のお爺さん」2009年12月1日～2010年1月15日



「のらくろ鬼中尉・非常呼集の巻」2009年12月1日～2010年1月15日



「忠臣蔵討入 第二巻」2009年12月15日～2010年2月1日

## 海外アニメーション



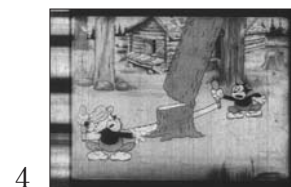
「ベティ・ブーブ 鏡の国訪問」2008年11月1日～2008年12月1日



「ハッピー・フリガン・従軍の巻」2008年12月15日～2009年2月1日



「ポパイ怪投手」2009年5月1日～2009年6月1日



題名不詳 (OSSO 木こり) 2009年5月15日～2009年6月15日



5

「ブル君の脱線航空兵」2009年9月15日～2009年10月15日



6

「モンキーの無敵艦隊」2009年9月15日～2009年10月15日



7

「凸坊とビルディング」2009年11月15日～2009年12月15日

## 実写、その他



1

「大紐育市2」2008年9月15日～2008年10月15日



2

「助けて呉れ、ライオンだ！ワニだ！」2008年10月15日～2008年11月15日



3

「護国の鬼 古賀連隊長」2008年11月15日～2008年12月15日



4

題名不詳（列車の内外）2009年2月1日～2009年3月1日



「ナイヤガラ瀑布」2009年2月15日～2009年3月15日



「Butler's Baby」2009年3月15日～2009年4月15日



「The Secret Kingdom (後)」2009年4月1日～2009年5月1日



題名不詳 (トラックの空爆) 2009年4月15日～2009年5月15日



題名不詳 (船火事) 2009年6月1日～2009年7月1日



「鹿・かも鹿・花鹿」2009年7月1日～2009年8月1日



題名不詳 (野球を声援) 2009年7月1日～2009年8月1日



「暁の決死隊」2009年8月1日～2009年9月1日

13



「関東大震災（記録）」2009年9月1日～2009年10月1日

14



「大和橿原神宮御参拝」2009年9月15日～2009年10月15日

15



「天晴れ三段跳び」2009年11月15日～2009年12月15日

16



「スピーデー・ロイド」2009年12月15日～2010年2月1日

# 「映像記録・日本民衆史学」 大阪・泉南地区におけるアスベスト被害と石綿村百年史Ⅱ

研究年度・期間：平成 21 年度

研究ディレクター：原 一男  
(映像学科 教授)

共同研究者：大森 一樹  
(映像学科 映像学科長 教授)

学外共同研究者：森 裕之  
(立命館大学 政策科学部 准教授)  
友長 勇介  
(フリー 写真家)

太田 米男  
(映像学科 教授)

村松 昭夫  
(京都大学 法学部 客員教授  
大阪弁護士会 弁護士)

小林佐智子  
(映像学科 非常勤講師)

豊原 正智  
(芸術計画学科 教授)

袖岡 一禎  
((泉南地区のアスベスト  
被害と市民の会)代表)

犬伏 雅一  
(芸術計画学科 教授)

下地 毅  
(朝日新聞 鳥取総局 記者)

中川 滋弘  
(映像学科 教授)

澤田慎一郎  
(京都精華大学 人文学部  
環境社会学科 学生)

私たちの研究は、“映像による対象者の記録”…映像というメディアの使い方としては、もっともオーソドックスな方法を選んだ。

つまり、取材対象者と信頼関係を構築し、対象者となる人々=民衆の“生活のありよう”を、カメラを回しながら、じっくり耳を傾け、記録していくというものである。

カメラを前に、緊張もし、照れながらも、自分の生の軌跡を語る人たち。ただただ、自分と家族たちの、ささやかな幸せを求めて生きてきた人たち。決して他人を踏みつけにしようとすることもなく、身の丈以上のものを求めもせず、野心など微塵もなく生きてきた人たち。

この1年を通して取材を継続した中で、私たちが感じ取った、もっとも大きなものは、“なんとイノセントな人々なんだらう”という驚きを含んだ感動である。

そんなイノセントな人々のひとりひとりが、ニッポンのどんな風土の中で、どういう親から生まれて、生んでくれた親もども、暮らしていける場所を求めて、日本のどの地域を移動してきたか、そして、住み着いた場所で、どう生計を成り立たせるためにどういう職を得たのか。出会った、やがてパートナーとなる異性は、どんな相手か、結婚し、子どもを産み、どういう生き方を選択してきたのか、を追っかけてきた。

“手に技術”を求められず、学歴を問われることもなく、年齢も関係なく、誰でも求めれば受け入れてくれる職場、それでいて日当は、かなり良かった。

ただ、労働は、ホコリ=アスベストの破片が始終舞っていて、呼吸するのがつらかった。が、そのホコリ=アスベストが、深刻な牙を剥き出して命に襲いかかってくる危険性については、誰も教えてくれなかったから、それほど気にもかけず、こんなものだと割り切って、仕事に精

を出した。

やがて、ホコリ＝アスベストが体中に侵入し、肺に引っかかり、内臓器官を傷つけ、破壊し、命を奪い始めていく。命を奪われる人がでて、さすがの無辜の人たちも、気がつき始めた。

知っていれば、いくら賃金がよくても、ここで働かなかったのに…と悔いてもせんないこと。利益を追求する側は、ヤバいことは伏せておくことに限る、という態度。

実は、クニは、そのヤバさを知っていたのだ。知っていて、何もしなかった。やろうとしなかったのだ。だから被害が拡大したのである。

お上にももの申すことを知らぬ人たちだったが、さすがに、ことの理不尽さに、イノセントな人たちも立ち上がった。裁判という場で闘い始めたのだ。

私たちは、これらの人たちへのインタビューを継続する中で、興味深い事実直面し、さらに追求を深めたいと考えている。

一つは、イノセントは人たちの出自の問題である。

統計的に…と言えるほど特徴を持ったパターンがあるわけではないが、受難の地＝「石綿村」泉南市に棲みついたが、それぞれ個別の出身地を聞いていくと…、隠岐島(島の中でもさらに辺境の村)、鹿児島(奥深い山間地)、沖縄だったり、と基本的には、地理的にニッポンの辺境の地から漂流して、そして「石綿村」泉南市に行き着いた、つまり、辺境の地とは、経済的にも貧しい、ということの意味し、“少しでも、いい暮らし”を求めて、このクニを流動する人々がいる、ということ。

さらに、「石綿村」泉南市におけるアスベスト産業を支える人たちの中でも、在日韓国人である人々が圧倒的に多い、ということ。在日韓国人たちの存在が圧倒的に多い、ということは、この国の戦後の政(まつりごと)の影を浮かび上がらせている、と言えるのではないだろうか。

在日韓国人の人々のことに、もう少し触れるなら、アスベスト産業の構造に現れてるのだが、その歴史において、初期の頃は大企業が担っていたのだが、次第に、中小の企業、さらに個人の事業者という存在に変貌していく。在日韓国人たちは、当初、労働者として関わっていくのだが、勤勉な人たちはやがて紡織機を自ら所有し、家内工業的な零細事業所を起こしていく。

このことがイノセントな人々の救済の状況を複雑にしている。つまり、ことが補償問題へと展開していったときに、資本家対労働者という構図を前提にした解決の道を成立しにくくさせて



いる。資本家といっても、ただか家内工業的な零細事業所である。災害補償の支払いを命じられても、その能力はない。その上に、資本の側も労働の側も同じ民族である。同じ民族同士ということもあり、家族ぐるみの付き合いといった親密な関係で維持してきた場が、加害対被害という関係に変貌したときに、イノセントな人たちの困惑は、どんなものだっただろうか。

死者の数も増え始め、社会問題化し、報道の量も増え、さすがのクニもその勢力を無視できず、アスベストの使用禁止へと舵を取らざるを得なくなり、裁判の場での戦いへと収斂されていく。

私たちの、1年間の作業は、とりあえず、ここまでである。引き続いて、今後の推移を見守りたい。そして、イノセントな人々=民衆という存在の堪え難い命の軽さをあぶり出したい、と願っている。

## 泉南アスベスト被害 調査・取材対象

- ◎旧栄屋石綿工業所跡地 樽井駅前一带
- ◎旧三好石綿工業所跡地 新家駅前一带  
(現 三菱マテリアル建材 本社東京)
- 他、旧ホンテス工業跡地(樽井)、旧光陽石綿跡地 等

### ○大阪泉南アスベスト国家賠償請求訴訟

#### 第一次原告

- ・石川チウ子 (泉南市)
- ・青木善四郎 (現 堺市)
- ・西村 東子 (泉南市)
- ・江城 正一 (泉南市)
- ・岡田 春美 (阪南市)
- ・岡田 陽子 (阪南市)

#### 第二次原告

- ・赤松 四郎 (泉南市)

### ○泉南地域の石綿被害と市民の会

- ・林 治 (泉南市)

### ○大阪じん肺アスベスト弁護団 公判・報告集会記録

### ○クボタ周辺地域住民被害の証言

- ・飯田 浩 (尼ヶ崎市)
- ・古川 和子 【中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会】

### ●医療

- ・みずしま内科クリニック 水嶋医師

# 「文化の学としての出版・編集論構築のための基礎的研究(3)」

研究年度・期間：平成 21 年度

研究ディレクター： 簗 亨  
(教養課程 教授)

共同研究者： 山縣 熙 (文芸学科 教授) 長谷川郁夫 (文芸学科 教授) 田中 敏雄 (教養課程 教授) 武谷なおみ (文芸学科 教授) 山田 兼士 (文芸学科 教授)

豊原 正智 (芸術計画学科 教授) 笹谷 純雄 (文芸学科 教授) 出口 逸平 (文芸学科 准教授) 福江 泰太 (文芸学科 非常勤講師)

学外共同研究者： 石塚 純一 (札幌大学文化学部 教授) 川上 隆志 (専修大学文学部 教授) 瀧本 雅志 (岡山県立大学デザイン学科 准教授)

近年いくつもの大学に出版また編集に関する講座が設けられるようになった。しかし、ジャーナリズム・情報学の一環、あるいは文学史・文化史講座の一部として扱われており、その問題の重要性にも拘わらず、各講師の経験、見聞、またその視野に捉えられた限りの問題を講ずるものにすぎないのが現状といえる。出版・編集は学問としては未開拓の領域に留まっている。編集・制作の技術をプラクティカルに教授することはそれなりに意義のあることであるが、大学という場においては、技術教育だけで十分とはいえない。それを支える理念構築へのアプローチが急がれる。

そこで、まずは「書物は一個の芸術作品である。つまり、一個の物体にすぎないが、品性を見え、特殊な思想の刻印を打たれた物体、また意志的な見事な秩序を目指した高貴な意図の存在を暗示する一個の物体である」(「書物および稿本について」)というポール・ヴァレリーの言葉を手懸かりとして、理想の書物を実在化させる編集・出版という機能を、前年度と前前年度の研究成果を踏まえて、

1) 歴史的なアプローチ、2) 文化面からのアプローチ、3) 創造性の観点、

以上三つの視座から下記の要領でさらに複合的に追求した。

1) については

・古事記など口誦(声)から写本(文字)への移行過程に「編集」はどのように機能したかを考察した。

・ゲーテンベルクの聖書印刷を取り上げ、「思想の刻印」といったテキスト発生の初源的な問題から、信頼すべきテキストの成立を目指すための「意志的な見事な秩序」としての、校正、校閲、索引の役割までを問うことをさらに試みた。

2) については、ゲーテンベルク以降、複製技術による書物がどのように文化を先導したか、大量消費、マス・メディアの時代において本とは何か、を問うことを推進した。

ここでは時代を読む力とされる編集における「企画」の意味、そのあり方が対象とされた。

また、本文の器としての書物という観点から浮かんでくる「高貴な意図」としてのデザイン・

装本の問題について、ウィリアム・モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動の仕事をさらに調査・研究した。そしてその成果の一端を、〈寿岳文章と「美しい書物」〉展（大阪芸術大学図書館、平成21年9月11日—10月1日）および〈ウィリアム・モリスと私家版：発展期の「ケルムスコット・プレス刊本」〉展（大阪芸術大学博物館、2010年1月7日～27日）において報告した。

3) については、文芸作品成立に関わる編集のはたらきについて考察を深めた。

テーマは多岐に亘り、とりあえずは試み、問題提起のための研究ではあるが、文芸学科のみならず、他学科の関連講座担当者との連携、また学外研究員の協力を得て研究会を開催し、各自のテーマについて報告し論議をさらに深めた。

また、本研究成果の一端は、朝日・大学パートナーズ・シンポジウム「書物の現在—21世紀に出版文化は可能か」（大阪国際会議場 平成22年3月21日）において報告されることになっている。

そして本年度の研究成果に関して、以下の個別研究テーマに基づいて、研究成果報告書を作成することになっている。

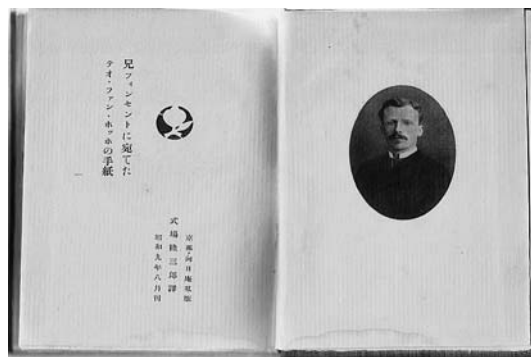
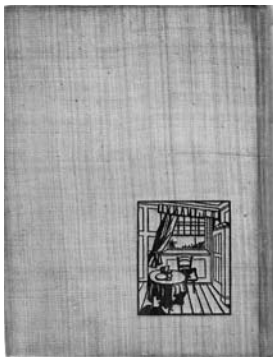
- 1、山縣 熙 ・出版・編集の原理論について
- 2、長谷川郁夫 ・出版・編集の研究・調査
- 3、藪 亨 ・ウィリアム・モリスと私家版運動
- 4、田中 敏雄 ・近世日本における画譜の出版・編集について
- 5、武谷なおみ ・出版・編集とイタリア文学の関係
- 6、山田 兼士 ・出版・編集と現代詩の関係
- 7、豊原 正智 ・出版・編集と映画の関係
- 8、笹谷 純雄 ・出版・編集と美術書の関係
- 9、出口 逸平 ・出版・編集と戯曲の関係
- 10、石塚 純一 ・出版文化史に関する研究・調査
- 11、川上 隆志 ・編集・日本文化史に関する研究・調査
- 12、福江 泰太 ・編集者の視座からの書誌学研究
- 13、瀧本 雅志 ・表象文化に関する調査・研究

以上

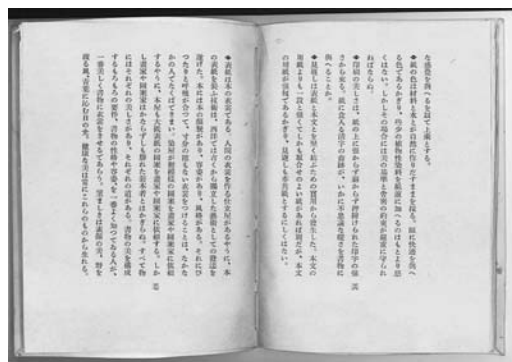
私家版関係資料



ウィリアム・ブレイク著 寿岳文章訳、『無染の歌』、向日庵私版、昭和7年発行。

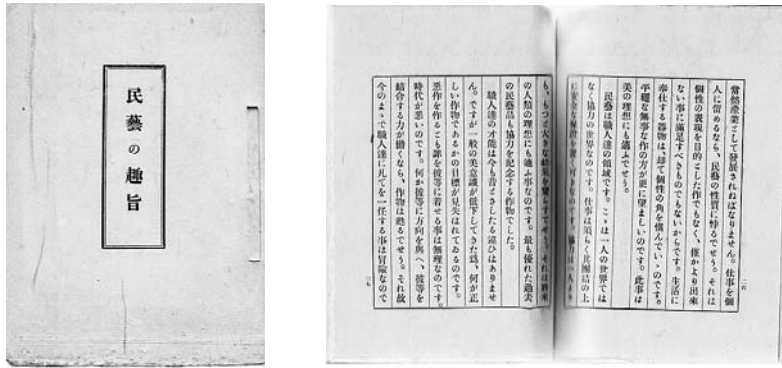


式場隆三郎訳、『テオ・ファン・ホッホの手紙』、向日庵私版、昭和9年発行。

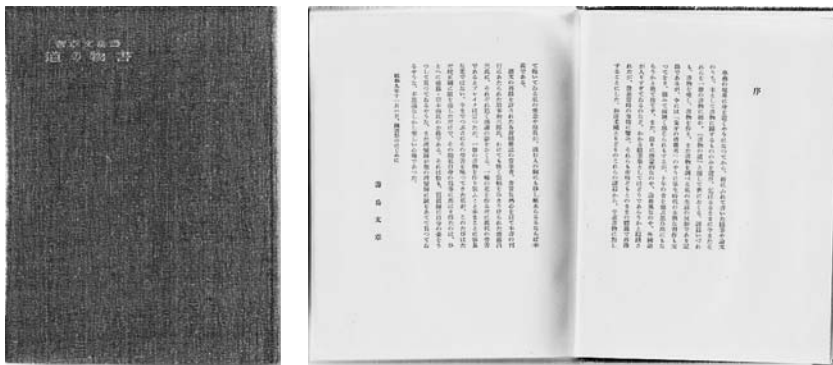


寿岳文章編、『書物』、向日庵私版、昭和11年発行。

私家版関係資料



柳宗悦著、『民藝の趣旨』、発行者柳宗悦、昭和8年発行。

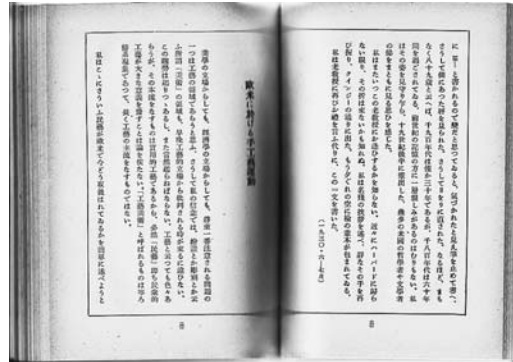


寿岳文章著、『書物の話』、書物展望社、昭和9年発行。



式場隆三郎編、『バーナード・リーチ』、建設社、昭和11年発行。

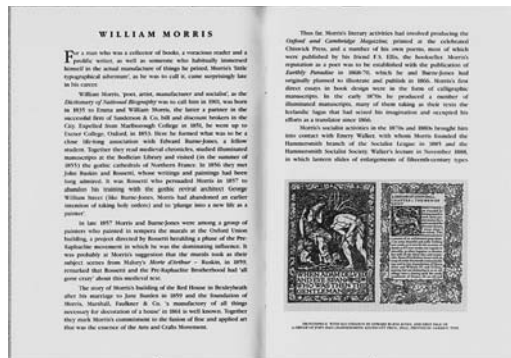
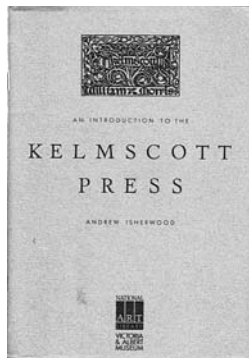
私家版関係資料



柳宗悦著、『私の念願』、不二書房、昭和17年発行。



『書物の趣味』第一冊、ぐろりあ そさえて、昭和2年発行。

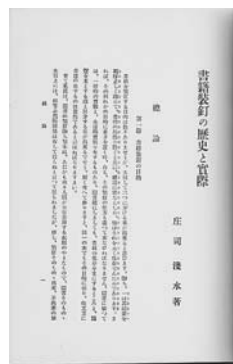


Andrew Isherwood, *An Introduction to the Kelmscott Press*, Victoria & Albert Museum, 1986.

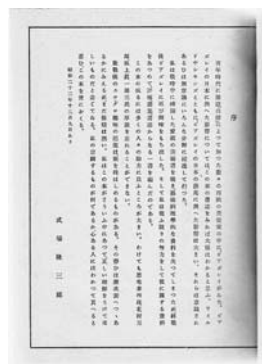




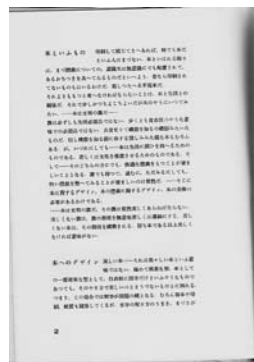
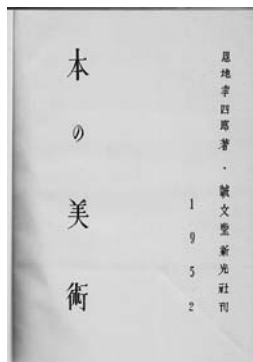
私家版関係資料



庄司浅水著、『書籍装釘の歴史と理論』、ぐろりあ そさえて、1929年発行。



式場隆三郎著『ピアズレイの生涯と芸術』、建設社刊、昭和23年発行。



恩地孝四郎著、『本の美術』、誠文堂新光社刊、昭和27年発行。